

日本語教育における文体指導
—用語の扱われ方をめぐる諸問題—

高野 愛子

Style training in Japanese language instruction
— some terminological problems

Aiko Takano

【要旨】

An often-observed problem in intermediate-level spoken and written expressions, together with vocabulary and grammar, are inappropriate stylistic distinctions. Expressions used in casual conversation with friends often may spoil the appropriate balance of reports' or oral presentations' style. What I noticed while teaching was the inconsistency of terminology and explanations regarding issues of 'style', as well as learners' low levels of awareness. This study therefore analyzes Japanese textbooks' descriptions of 'style', examine the terminology and the explanations they contain, and explore how learners understand them. As a result, it became clear that efforts are needed, in order for learners to master stylistic aspects, to provide a unified, consistent terminology, and intuitive explanations that resonate with students' intuitions. Learners' responses to the survey revealed the following: that the styles students find easier to grasp are 'da/dearu' and 'desu/masu'; the explanations they better understood include

terms such as 'soft/light/friendly talk/casual' or 'stiff/formal/polite'; and finally, that, in order to appeal to learners' intuitions, it is useful to use a broad range of situation-specific practical examples regarding both spoken and written language, and lists of stylistic variations of the same semantic item.

0. はじめに

0 - 1. 問題提起

大学機関における外国人学習者（NNS）の日本語科目「文章表現」「口頭表現」を指導していて最も問題であると感じていることは、学習者の「文体」の使い分けが不適切なことである。とくに中級以降の文章表現・口頭表現において、語義的な語彙・形式的な文法の誤用とともに、文体の使い分けが不適切であることが目立つ。それは例えば、以下のような実例に見られる現象である。（表記・文法等の誤用は学習者の表現そのまま、下線は筆者）

【文章表現の例】（学生：韓国・日本語能力試験1級合格レベル）

何でこんなはじめが存在するのかな。韓国にもメタドリムモという言葉がある。でもはじめとは違う。シカトの意味が強い。韓国は日本の国民性を自分なりに比べどっちかという日本人は個人主義がもつと強い傾向を感じる。

【口頭表現の例】

- ・みなさんは知ってると思いますが、
- ・いろんな例があります。
- ・だって高いんだから
- ・すごく大きい
- ・お金がかかっちゃうんです。
- ・～っていうのは、
- ・いっぱいあります。
- ・作ったけど、

このような違和感は、井上（2009）も「外国人留學生が書いたレポート・論文を読むと、日本語としての不自然さや違和感を覚えることがある」と述

べているように、日本語教育の現場ではよく見られることである。レポート・論文の書きことばだけではなく討論・発表の話しことばにおいても、いわゆる「会話体」「友だち言葉」のような「軽い」文体が用いられている。

語義的・形式的に「正しい」表現であってもそれらが友人同士に使う表現であることから、レポート・論文や討論・発表に「適切な」「ふさわしい」文体にはならず全体の期待されるバランスが崩れ、日本語としての「不自然さ」「違和感」につながっているのである。

この「不適切さ」「不自然さ」「違和感」については、池上・守屋（2009）で「興味深いことに、母語話者は学習者の形式的な誤用よりも、こうした認知に関わる不適切な言い回しに、よりインパクトを感じます。例えば、『デパートに買い物します』のような文法的誤用には寛容でも、『私はアンです。あなたは林さんですか？』などの表現に母語話者はより違和感を覚えるのです。」と指摘しているように、大学生としてそしてすぐに社会に出る者として、緊急に身につけるべき日本語の感覚である。

高野（1995）で、筆者が担当した日本語専攻の留学生対象「口頭表現」における討論・発表において観察された発話の傾向について分析したところ、音声・文法・語彙の誤用以上に、授業の発表にふさわしくないと感じられる表現がとくに目立ち、「普通体の出現」「会話体に特有な表現（縮約等）の出現」「文節末での間投助詞『ね』の使用」がスピーチ・レベルを低くしている要因であることが明らかとなった。これらは文法的には誤用とは言えず、意味も通じるものである。しかし、大学における演習などで討論・発表する場合には「不適切」で「ふさわしくない」表現であるため、それを学生に繰返し指摘し指導してきている。

学習者が語義的・文法的に「正しい」「適切な」表現を選んでいながら「不適切な」表現になってしまう要因はさまざま考えられるが、指導しながら気づいたのは、初級のレベルから中級以降の教科書における「文体」に関する教育が不十分なこと、用語や説明のされ方が統一されていないこと、学習者自身の認識の低さである。文体の感覚を学習者に指導する際に、「丁寧に」

というと「敬語ですか」という反応が多数を占めて「いらっしゃいます」「おります」にすればよいと単純に考えがちであったり、また、「です・ます体」でと指示すると、「ありますと思います」「そう思うでしょう？」のような例が出てくる等、なかなかその「適切さ」の感覚が伝わらない場面に遭遇してきた。さらに、発表の時には「硬い」、友人と話す時には「軟らかい」、発表の時に「やっぱ」という表現をつかうと「ぞんざい」な印象であるということの説明を試みてもなかなかその「用語」自体の語義や感覚が伝わらないことも痛感してきた。

学習者自身も「正しい」「適切な」「自然な」日本語を運用することを目標にしていることから、学習者教師双方にとって大事な関心事であるにもかかわらず、他の分野に比べて具体的な指針や指導法があまり進んでいない状況である。先に挙げた学習者の発話や文章を添削・修正する際には、多くは教師個人の「語感」によってなされているのが現状である。

0 - 2. 先行研究：文体の分類と名称

「文体」の定義はさまざまあるが、語の「文体」については、従来の宮島(1977)による5分類；「俗語」「くだけた日常語・無色透明な日常語・あらたまった日常語」「文章語」、田中(1999)でおこなっている接続表現の用法「会話的」「話しことば的」「一般」「書きことば的」「文語的」の5段階について、「一般」＝「普通」の文体、「会話的」なもの＝「うちとけた」文体、「文語的」なもの＝「かたい」文体としているものがある。

また、井上(2009)では、論説文における文体の適切性の観点から、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』から得られる各種コーパスの語の文体と位相について、「白書＝文章語・書きことば」、「国会議事録＝あらたまった日常語・話しことば」、「書籍＝無色透明な日常語・書きことば」、「Yahoo!知恵袋＝日常語・話しことば」というような対応関係を示している。さらに、宮島(1977)の5分類を、記号「<」を書きことばらしさの強弱、「≦」を論説文に用いる語としての適否の境界を表すとして、「俗語<くだけた日常語

≒無色透明な日常語<あらたまった日常語<文章語」のように位置づけ、主に論説文における語の文体の適切性の判断のために、教育上・実用上の視点から文体の2分類を提案している。

また、三牧（2007）では、主にスピーチ・レベルの観点から「日本語の文体には、丁寧体（です・ます体、敬体、フォーマルスタイル）、普通体（だ体、常体、インフォーマルスタイル）、である体、のようなバリエーションがある」とし、「各々を適切に使用すること、また、相手や場面に応じて使い分けることは、日本語学習者にとって大きな課題であり、日本語教育の中でも習得が困難な課題の一つとされている」と述べている。

以上のように、このような「文体」を表す「用語」は、「用語」そのもの自体があまり統一されておらず、また、どこからを文体差とするかの線引きの判断、さらに、その感覚・印象を説明する言葉自体も学習者が理解できていない実態と、日本語教育の現場ではあまり意識的・体系的に指導されていない。

そこで、本稿では、学習者がどのように文体を学んできているのか、教科書や授業ではどのような説明がなされているのかを調査・分析し、日本語学習者にとって理解しやすい用語・説明とは何かを模索するための第一段階の資料としたい。

まず初めに、学習者が最初に出会う「日本語初級教科書」での扱われ方を概観し、次に文体の使い分けが要求される中級以降の「文章表現」の教科書における扱われ方を分析することにする。

1. 初級日本語教科書における「文体」の扱われ方の実際

1-1. 各教科書の用語と提出順

日本語学習者はどのように日本語の文体を学び、習得してきているのだろうか。ここでは、以下の初級日本語教科書5種で扱われている「文体」と文体に関係する「活用形」に注目し、その扱われ方と用語について考察することにする。（下線は筆者）

初級日本語教科書

初級①『みんなの日本語 初級 I・II』全50課

初級②『初級日本語 新装版』全28課

初級③『新版 中日交流標準日本語初級 上・下』全48課

初級④『初級日本語 げんき I・II』全23課

初級⑤『にほんごがいっぱい』全20課

課	例文	用語
① 1 6 18 20 49 50	学生では(じゃ)ありません。 朝6時に起きます。 パソコンを使うことができますか。 アイスクリーム食べる？ 辞書(を)もって(い)る？ 課長はもう帰られました。 私はアメリカから参りました。	Nです Vます形 V辞書形 V普通形(⇔丁寧形) 普通体(⇔丁寧体) plain/polite style 尊敬語 謙讓語
② 1 3 9 12 28	わたしは たなかです。 コーヒーを のみますか。 たぶん じゅぎょうを 休むでしょう。 あした きょうとへ いく と 言いました 先生、何時にお帰りになりますか。 お荷物をお持ちしましょう。 「JR」って何ですか？	Nです Vます ますの形 辞書形 Plain Form 敬語表現(尊敬) 敬語表現(謙讓) 縮約形
③ 1 5 20 22 47 48	李さんは 中国人です。 守さんは7時に起きます。 わたしの趣味は切手を集めることです。 明日ボーリングに行かない？ 周先生は明日北京へ行かれます。 お荷物は私がお持ちします。	名です ます形 基本形 簡体形(⇔敬体形) 尊他語(敬語) 自謙語(敬語) です・ます=礼貌語

④	<p>1 <u>じゅうにじはんです。がくせい</u>です。</p> <p>3 しゅうまつは <u>なにを</u> <u>します</u>か。</p> <p>8 メアリーさんも<u>来</u>ると思います。</p> <p>よく魚を<u>食</u>べる？ ううん、<u>食</u>べない。</p> <p>9 トムさんが<u>や</u>ったと思います。</p> <p>きのう、<u>テレビを</u>見た？ううん、<u>見</u>なかつた。</p> <p>19 大学に<u>い</u>らっしゃいます</p> <p>20 田中と<u>申</u>します。/<u>お持</u>ちします</p>	<p>desu</p> <p>ます形=long forms</p> <p>short forms(現在)</p> <p>=dictionary forms</p> <p>informal speech</p> <p>short form(過去)</p> <p>informal speech</p> <p>尊敬語（丁寧に話す）</p> <p>丁寧語／謙讓語</p> <p>（へりくだって話す）</p>
⑤	<p>1 エレナ<u>で</u>す。まささんは <u>がくせい</u>ですか。</p> <p>4 あさ <u>たい</u>てい なんじに <u>お</u>きますか。</p> <p>7 誕生日プレゼントを<u>買</u>うつもりです。</p> <p>10 私は学生<u>で</u>す。→私は学生<u>だ</u>。</p> <p>15 ところで、エレナ、僕に「<u>で</u>す」や「<u>ま</u>す」を使わなくてもいいよ。…ふつう日本人は、親しい人と話するとき、<u>です</u>ます調で話さない<u>ん</u>だ。 <u>お</u>書きになります/<u>お</u>書きします</p> <p>20</p>	<p>the copula(polite)</p> <p>masu form</p> <p>Base form</p> <p>Plain forms</p> <p>(⇔ desu-masu styles</p> <p>polite forms)</p> <p>カジュアル・スピーチ</p> <p>casual / formal</p> <p>conversation</p> <p>敬語（尊敬／謙讓）</p> <p>待遇表現</p> <p>plain style vs. polite style</p>

1.2. 分析とまとめ

5種の初級教科書の用語をみると、「文体」の扱い以前に「文法」用語としての「活用形」名も統一されておらず、また「文体」として扱えるところも「文法」事項として扱われていることがわかる。これは、三牧（2007）でも「従来、研究と日本語教育の双方に渡って、文体は文法面から形式が目されがちで、運用面に関する実態把握や有効な指導法に関する実績の蓄積が少ない」と指摘されている通りである。

上記5種に表れた用語をまとめると、以下のようになる。

	N (学生です) V (見ます) いA (大きいです) なA (元気です)	N (学生だ・である) V (見る) いA (大きい) なA (元気だ・である)
活用形としての文法用語	Nです / desu the copula(polite) ます形 丁寧形 masu form polite forms long forms	基本形 普通形 辞書形 dictionary forms base form plain forms short forms
文体の観点からの用語	丁寧体 polite style formal conversation desu-masu styles 簡体形	普通体 plain style casual conversation カジュアル・スピーチ informal speech 敬体形

提出順をみると、いわゆる「Nです」は、上記5種すべての日本語初級教科書が第1課から登場し、動詞の初出も「Vます」、いわゆる「ます形」で提出されている。姫野(1998)で「初級レベルでは、一般に敬体『です・ます体』が使われる」とあるように、「です・ます体」から導入されるのは、学習者(NNS)が実際の会話場面で「普通体」を使うと、多くのネイティブ・スピーカーである日本人(NS)が「失礼だ」「馴れ馴れしい」と感じるような否定的な反応を避けるためであるが、学習者には文体の全体像を知らせたり、そのような語感を説明することもなく、学習者自身も意識することなく「です・ます体」から導入されている。

そして、ある時突然、「友だち」レベルの「文体」、いわゆる「だ・である」「普通体」が登場することになる。例えば、初級①は、国内外で最も多く用いられている代表的な日本語初級教科書であるが、文型シラバスの全50課中、18

課で「パソコンを使うことができますか」の動詞「使う」が「辞書形」としての初出で、20課「アイスクリーム食べる？」の述部の動詞「食べる」が「普通形」としての初出として登場する。句型練習では、それまで「ます形」と読んでいた「Vます」をここで突如「丁寧形」として「かきますーかく」を「丁寧形—普通形」として対比させて練習させる。この課では友人同士レベルの会話を想定した例文・会話文となっており、ここでは、「食べる・食べない・食べた・食べなかった」のいわゆる「普通形」“plain form”として扱われているのと同時に、「普通体plain style—丁寧体polite style」としても扱われているのである。その後、動詞の「普通形」を含む文型の導入課が続き、これ以降は全50課中で「普通体」の扱いが全くないため、この20課の位置は「普通形」の導入のためのものであり、本質的な「文体」を学ばせるためではないと考えられる。

初級②③は、会話の「文体差」として広義の「敬語」の提出時に「尊敬語」「謙讓語」「丁寧語」の概念と文の形式を教え、「カジュアルな文体」を導入している。この場合、たいていは教科書の最後で扱われるので、学習者は初級終了時までこの文体差に少なくとも教科書上は触れないことになる。

初級④⑤は、比較的早い段階で「普通体」「カジュアルな文体」を提出している。しかし、文法形式としての活用形と共に提出しているので、文体の全体像はわかりにくく、現場でも初期段階から文法形式と共に扱うことの難しさを聞く。

三牧（2007）では、この問題を解決するために、「文法項目として丁寧形、普通形、敬語等を導入する際に、それらが文体としていかに使用されるのかをその都度指導するだけでなく、成人の学習者であれば、入門期および中期初期の段階で、日本社会においてコミュニケーションする際に文体が果たす役割を含め、その全体像を講義形式にて示すことを提言したい」、「初級の学習者は、文体に関する認識は低く、会話中も意識されにくい。そこで、初期の段階から日本語の話し言葉には大きく丁寧体と普通体という2種類の明確に区別される文体があること、それぞれがどのような社会文化的な意味を持

つかについて十分説明することがまず重要であろう」と、全体像を講義形式で示すこと、初級段階から文体を意識させることを提案しており、筆者も全面的に同意する。話しことばだけではなく、書きことばにおいても、文体として丁寧体と普通体の使い分けがあることを同時に具体例で説明し全体像や文体差・語感を意識したうえで、従来の「です・ます」体中心で初級を学ぶことは学習者にとって有用であろう。そのためにも、文法項目としてではない「文体」の初級における学習項目・用語の整理、指導要領の整備が必要であると考えられる。

2. 中級以降における「文体」の扱われ方の実際

初級だけでも、各教科書によって用語や扱われ方が異なっているが、それぞれの教科書で学習した学生たちが中級に進み、技能別クラスで文章表現・口頭表現ではまた、それぞれ異なる用語や説明にぶつかることになる。ここでは、中級以上の文章表現の教科書における文体の扱われ方の実際をみることにする。

2-1. 文章表現の教科書における文体の用語と分類

2-1-1. 各種教科書はどのように文体を分けているか

以下は、各教科書名・提出課と文体に関する解説と用語の名称・分類を表に整理したものである。(下線は筆者)

①『実践にほんごの作文』(1986) III	
文末の表現は、話し言葉のていねい体(～です、ます)を使わずに、すべて普通体を使うようにする。	
ていねい体 (～です、ます)	普通体

②『日本語の書き方ハンドブック』（1986） II-3 表現の仕方 文体		
です・ます体 話す調子で書くもの、年少者向けに書くもの、説明書、手紙などに使われる文体	だ体 話す調子で書くもので、「です」「ます」体ほど丁寧でないものに使われる文体	である体 論文、論説文、新聞記事など、 <u>かたい</u> 文章に使われる文体
③『大学生と留学生のための 論文ワークブック』（1997） 基礎編 1よく使われる文の形		
ふだん使われる文の形 結果を記したのがTable3です。	論文で使われる文の形 結果を記したのがTable3である。 新聞では「～だ」で終わる普通体が見られるが、論文ではこの形はあまり用いられない。	
④『留学生のための論理的な文章の書き方』（2000） 第1課 レポートに使われる文体 “名詞、形容動詞の場合、大学でのレポート、論文の文末表現としては、「～だ」より「である」のほうが客観的な印象を与えるので、「～である」の方を使うようにしよう。”		
「です・ます体」 相手に話しかけるような <u>気持ち</u> で書く文章に適している。		「である体」 大学で書くレポートや論文は自分の気持ちを書くものではなく、 <u>事実や意見を客観的に述べるもの</u> である。
⑤『大学・大学院留学生の日本語②作文編』（2001） 第2課 文体と書き言葉		
です・ます体 手紙、はがき	だ体 日記	である体 レポート、論文、 研究計画書
⑥『大学・大学院留学生の日本語④論文作成編』（2001） 第2課 作文の基本（2） 「です・ます体」ではなく、「だ体」と「である体」で書きます。「だ体」と「である体」では、「である体」の方が、硬いあらたまった文体です。「だ体」と「である体」は、一つの文章の中で一緒に使うことができます。特に強調したいところに「である体」を使うと効果的です。		
「です・ます体」	「だ体」	「である体」

⑦『プラクティカル日本語 文章表現編 —成功する型—』(2003) 7章 文体の統一 理論的な文章で「である体」を使う場合、「だ」の形は使わず、「である」の形を使う。 ○これは新しい研究である。 ×これは新しい研究だ。		
です・ます体 相手に話しかけるような気持ちで書く時に用いる。丁寧 ^に に相手に話す時にも使う。		である体 自分の気持ちを込めずに、事実や意見を客観的に書く時に用いる。
⑧『小論文への12のステップ』(2008) 2文体 小論文は口で話すのではなく、事実や意見を文字で述べるものです。文体はふつう、丁寧体(です・ます体)ではなく、普通体(だ・である体)を使います。(論文では「～だ」より「～である」のほうがよく使われます。)		
丁寧体 (です・ます体)		普通体 (だ・である体)
⑨『留学生のためのここが大切文章表現のルール』(2009) 第10課 書き言葉らしさ		
話し言葉	書き言葉	
	軟らかい書き言葉 日常的な文章、講義や公的な発言(formal speech)でも用いられます。	硬い書き言葉 「だ・である体」で書かれた論文のような硬い文章の場合は「話し言葉」はほとんど使うことがなく、「硬い書き言葉」で統一して書かれることが多いです。
⑩『留学生と日本人学生のための レポート・論文表現ハンドブック』(2009) コラム3 句・節・文の末尾の形		
「です・ます」体 使わない	「だ」体 あまり使わない 例：日本だ、困難だ	ーする／である体 使う 例：日本である、困難である、述べる

2-1-2. 文体の分け方：考察

中級以上の「文章表現」「作文」系の教科書で提示されている文体の分け方は、2種類または3種類である。2種類の場合のカテゴリーは、「丁寧体／普通体」、「です・ます体／だ・である体」が中心であり、3種類の場合は、「です・ます体／だ体／である体」となっている。

「だ体」「である体」についての使い分けは、教師学生双方にとって難しいところなのだが、教科書によってその説明に違いがみられる。

まず第一に、「だ体」の使用を認めるかどうかである。文章④・⑦では、そもそも「だ体」の設定をしておらず、④では「『～だ』より『である』のほうが客観的な印象を与えるので、『～である』の方を使うようにしよう。」、⑦では「理論的な文章で『である体』を使う場合、『だ』の形は使わず、『である』の形を使う。」とし、その用例で「○これは新しい研究である。×これは新しい研究だ。」のようにはっきりと「だ体」を使うことを認めていない。

「だ体」の設定をしている教科書の場合をみると、文章⑥では「『だ体』と『である体』は、一つの文章の中で一緒に使うことができます。特に強調したいところに『である体』を使うと効果的です。」と、「だ体」を使うことを比較的積極的に許容している。また、文章⑧で「論文では『～だ』より『～である』のほうがよく使われます。」、文章⑩で「『だ』体はあまり使わない。『～する／である体』を使う。」という説明になっているように、「だ体」<「である体」というような使い分けが提示されている。（下線は筆者）

以上のように、教科書によって使用の可否自体も異なり、また混用を認めている場合でも「である体」が優勢である。「である体」は、強調したいところには「効果的」であり、「よく使う」というような説明があるが、では、どの程度ならいいのか、そのバランス等は具体的に示されておらず、結局は現場の教師の感覚によるところとなる。

2-2-1. 文末以外の表現

文末以外の表現については、文章②～⑩で取り上げられており、②「会話的表現と書き言葉表現」、③「論文で使ってはいけない語と表現—論文で使われる語と表現」として、その用例を対比させリストにしている。どの教科書にも共通している項目は、「接続助詞、接続詞、副詞、疑問表現、指示表現、縮約形、その他（和語—漢語、敬語）」である。その分け方は、文末の文体同様、2種類または3種類であり、それぞれ感覚の説明が異なったり、同じ順接の類の接続詞に過不足があったり、副詞「少々」のように同じ語彙でも違うカテゴリーに属しているものもある等、ここにおいても統一されていないことが見られる。以下は各教科書のリストから抜粋である。（下線は筆者）

文章⑦ [7章 文体の統一 3「である」体を使う文末以外の表現]

〈会話体 → です・ます体 → である体〉

接続詞 だから／なので → ですから → したがって

縮約形 書かなくちゃ → 書かなくては → 書かねば

その他の表現 ちょっと → 少し → 少々／多少／若干

* 「いい」は「よい」の形を使う。

○ 調査の結果、よい結果が得られた。×調査の結果、いい結果が得られた。

文章⑧ [3 モードチェンジ 話し言葉から書き言葉へ]

小論文を書く時は相手に話すような文体ではなく、硬い文章で書きます。

くだけた会話の場合と小論文の場合の違い

	話し言葉や <u>軽い</u> 文章では	小論文では
接続の言葉	だから ですから	そのため したがって
副詞など	すごく とっても ちょっと <u>少々</u>	非常に 少し わずか
縮約形を使わない	準備しといた 見てる	準備しておいた 見ている

文章⑨ [第3部 語彙・意味 第10課 書き言葉らしさ]

話し言葉	書き言葉	
	軟らかい書き言葉	硬い書き言葉
このごろ	最近	近年
すごく	とても	非常に
いい方法	よい方法	賢明な方法

話し言葉	例文	書き言葉	例文
全然	雨が全然降らない。	まったく	雨がまったく降らない。
どんどん	どんどん成長した。	急速に	急速に成長した。
たぶん	たぶん暇だと思う。	おそらく	おそらく暇だと思う。

2-2-2. 練習問題

文章⑧⑨には、「くだけた会話」「話しことば」での表現が混用されている文を提示し、適切なものを選択させたり、発見させたり、その部分に下線をつけたりして、「小論文」にふさわしい文体の表現に修正させる、以下のような練習が豊富にある。（注に模範解答）

- (1)最近、携帯電話のマナーの悪さが(aすごく b非常に)目につく。（文章⑧）
- (2)続けてやればよい結果が出るんじゃないかな。（文章⑧）
- (3)日本でもタバコを吸う人はだんだん減って来ているという。（文章⑨）

2-2-3. 考察

先にも述べた「少々」の文体をどう考えるか、文章⑦では、〈である体〉の文体で使うように分類されているが、文章⑧では、「話し言葉や軽い文章」の枠に分類されているというように、この分類の仕方に曖昧さがあることがよくわかる。

また、文章⑦では、論文のときには「よい結果」を○、「いい結果」×としているのだが、実際に学生が「いい」と記述しているのを×として添削する教師がどれだけいるだろうか。個人の語感では同じように判断に難しいところであるので、やはり、井上（2009）の提案通り、様々な文体の文章から

なるコーパスの頻度などがその拠り所となるであろう。これは、種々大量の語彙を検討する際の判断基準となり、その線引きを示すことが今後の課題となる。

また、コーパス等で得られたそれぞれの文体の典型的な文章の実例を具体的に学習者に提示し、その使い分けの実際によりそれぞれの文体の差、語感の違いが習得できるものと期待できる。このような試みは以下のように文章⑧でもされており、学習者の反応は概ね良好であった。教科書には文章の例が挙げられているのだが、ここでは紙面の都合上、媒体を記すのみにして文章は省略する。

文章⑧ [1 文章の種類と文体]

文章の種類	文体・使われる言葉	例
子どものための本	やさしい書き言葉 (丁寧体)	昔話の絵本 小学校の社会科のプリント
新聞記事	書き言葉 (普通体)	新聞記事
レポート 論文 法律 規則など	硬い書き言葉 (普通体)	道路交通法第65条 就業規則論文
説明書 エッセイ 小説 手紙 お知らせ メール など	やわらかい書き言葉 (丁寧体・普通体)	犬の飼い方パンフレット 手紙 エッセイ
発話のための原稿 (講演やスピーチの原稿 ニュースや司会などの台 本 ドラマのシナリオ など)	硬い話し言葉 (丁寧体) 丁寧な話し言葉 (丁寧体) いろいろなレベルの話し 言葉	立候補演説の原稿 スピーチの原稿 テレビのニュース解説の原 稿 テレビドラマのシナリオ

3. まとめ

以上、初級日本語教科書・中級文章表現の教科書における、文体の扱われ方の実例を挙げてきたが、これらに見られる「文体の名称」「その説明・感覚」

の用語をまとめると、以下のようになる。

3-1. 用語のまとめ

文体の名称	説明・感覚
常体 だ体／だ・である体 普通体	かしまった／あらまだった／硬い／ 丁寧なpolite／フォーマルformal／公的なofficial 自分の気持ちをこめない／客観的
敬体 です・ます体 丁寧体	ぞんざいな／くだけた／軟らかい／やさしい／ 軽い／うちとけた／カジュアル casual／ 相手に話しかけるように

以上のように、各種教科書における文体に関する用語や説明は、統一されているものではなく、「だ体」「少々」など許容の範囲も異なり「ゆれ」がみられる。文法のように誤用・非文であるとはっきり説明できない表現が多く、語彙的にも文法的にも正しいゆえに、「正しくない」とはいえず、文体として「ふさわしくない」「適切ではない」というような説明になる。そこで、学習者にその語感や許容の範囲をどう伝えたらいいだろうかということが、改めて問題となる。

3-2. 「レポート・小論文」の表現から「討論・発表」の表現へ

この「討論・発表」のような「話しことば」の文体の使い分けは、文末表現「です・ます体」にすること以外「レポート・論文」における文体の使い分けとほぼ共通していることから、発表原稿をレポートの文体で書かせ事前にチェックすることによって、発表らしくない文体＝「くだけた」「カジュアルな」文体の使用を避けることができる。

口頭表現中心の教科書『アカデミック・スキルを身につける聴解・発表ワークブック』（2007）には、文章表現の表現変換練習と同様の練習：「関係があるって言われています→」「EUなんかでは→」等を「丁寧な話し言葉」に直すものがあるが、第1課直後の1ページのみにすぎず、十分ではない。

「文章表現」においても「口頭表現」においても、模範となるような実例、文体の対比リストを参考に表現を学ぶことも大いに役に立つが、このような、あえて「ふさわしくない」文体の表現に注目させ、「適切な」表現を考えさせ、

教師がするような添削を学習者自身がするという練習も効果的であると考えられる。

模範の提示と修正練習を学習の初期段階だけではなく継続的に行えば、学習効果も大きいだろう。実際、教室活動中に繰り返し文体の不適切さを指摘し続けてみたところ、学習者自身の意識化が深まり、自ら認識できるようになったという声があった。

書きことば・話しことば両者を分析し、文体差として使い分けの基準を求めることは有用であると考えられ、両者技能の統合も可能であろう。

3-3. 学習者の認識

「文章表現」履修学生に、どの名称がわかりやすいか質問したところ、文体の名称でもっともわかりやすいのは「だ・である体」「です・ます体」の組み合わせであった。「文法的ではなく具体的だから」という理由を挙げた学生もいた。

また、感覚の説明は「やわらかい・軽い・友だちことば・カジュアル」「丁寧な・フォーマル・かたい」で、「ぞんざいな・くれた」「かしこまった・あらたまった」の認識度は低かった。「友だちことば」の俗語的呼称である「タメ語」と言われればすぐその感覚がわかるという学生もいた。(韓国の学生なので、これは「パンマル」という韓国語的な感覚があるからだと思われる。)

また、文章⑧⑨のような、対比リスト、具体的な文章の文体の実例、適切な表現に直す豊富な練習問題はとても役に立つとの声が多かった。学習者の語感に訴えるためには、書きことば・話しことばそれぞれについて目的場面別の具体的な例文を豊富に提示することが必要であり、また同じ語義の文体レベル別のリストが「とても役に立った」という反応が多く、このリストが有用であることが明らかとなった。

中国語・韓国語・英語・イタリア語・アラビア語・ペルシャ語・ヴェトナム語の母語話者に確認したところ、各母語において、友人との「軽い話し方」と発表のような「硬い話し方」の間、友人へのメールや日記などの「やわら

かい書き方」やレポート・論文などの「フォーマルな書き方」の間には日本語ほどの差はないとしても、確実にその文体差・感覚の差があるという。このことから、場面・媒体別に文例を豊富に示せば、母語での感覚に訴えることもできるであろう。

おわりに 今後の課題

今後の課題は、今回明らかになった文体に関する分類の基準・多様な用語・解説・感覚について、学習者にさらに実践・確認をしながら、どれがもっとも理解しやすく明解なのかを探り、用語の統一に向けることと、文体差の判断基準を探ること、それぞれの文体の典型的な例を収集、対比リストを作成し、文章表現・口頭表現の両方に役立つような学習者がいつでも参照できる資料・素材を作成することである。

注 模範解答 (1) b非常に

(2) 続けてやっていたらいい結果が出るのではないだろうか。

(3) 日本でも喫煙者は次第に減少しつつあるという。

■参考文献■

- 宮島達夫 (1977) 「単語の文体的特徴」『松村明教授還暦記念国語学と国語史』明治書院
- 姫野昌子・小林幸江・金子比呂子・他 (1998) 『ここからはじまる日本語教育』ひつじ書房
- 高野愛子 (1995) 「発表形式の授業における留学生の発話傾向—スピーチ・レベルを中心に」『語学教育研究論叢』第12号 大東文化大学語学教育研究所
- 田中章夫 (1999) 『日本語の位相と位相差』明治書院
- 坂野永理・大野裕・坂根康子・品川恭子編著 (2000) 『初級日本語 げんき I・II 教師用指導書』The Japan Times
- 犬飼康弘 (2007) 『アカデミックスキルを身につける聴解・発表ワークブック』スリーエーネットワーク
- 三牧陽子 (2007) 「文体差と日本語教育」『日本語教育』134号 日本語教育学会
- 井上次夫 (2009) 「論説文における語の文体の適切性について」『日本語教育』141号 日

本語教育学会

池上義彦・守屋三千代編著 (2009)『自然な日本語を教えるために 認知言語学をふまえて』
ひつじ書房

東京外国語大学留学生日本語教育センター指導書研究会編 (2009)『直接法で教える日本語』
東京外国語大学出版会

■分析対象教科書■

初級①『みんなの日本語初級 I・II』(1998)スリーエーネットワーク

初級②東京外国語大学留学生日本語教育センター『初級日本語 新装版』(1994)凡人社

初級③甲斐陸朗・西尾瑠子・宮地裕監修『新版 中日交流標準日本語 初級 上・下』(2005)
人民教育出版社・光村図書出版

初級④坂野永理・大野裕・坂根康子・品川恭子編著 (2000)『初級日本語 げんき I・II』
(2000) The Japan Times

初級⑤李徳泳・小木直美・當眞正裕・米澤陽子『にほんごがいっぱい』(2009)ひつじ書
房

文章①佐藤政光・加納千恵子・田辺和子・西村よしみ『実践にほんごの作文』(1986)凡
人社

文章②稲垣滋子『日本語の書き方ハンドブック』(1986)くろしお出版

文章③浜田麻里・平尾得子・由井紀久子『大学生と留学生のための 論文ワークブック』
(1997)くろしお出版

文章④二通信子・佐藤不二子『留学生のための論理的な文章の書き方』(2000)スリーエー
ネットワーク

文章⑤アカデミック・ジャパニーズ研究会編『大学・大学院留学生の日本語②作文編』(2001)
アルク

文章⑥アカデミック・ジャパニーズ研究会編『大学・大学院留学生の日本語④論文作成編』
(2001)アルク

文章⑦清水明美・岩沢正子・加藤清・武田明子・福沢健『プラクティカル日本語 文章表
現編 —成功する型—』(2003)おうふう

文章⑧友松悦子『小論文への12のステップ』(2008)スリーエーネットワーク

文章⑨石黒圭・筒井千恵『留学生のためのここが大切文章表現のルール』(2009)スリーエー
ネットワーク

文章⑩二通信子・大島弥生・佐藤勢紀子・因京子・山本富美子『留学生と日本人学生のため
のレポート・論文表現ハンドブック』(2009)東京大学出版会